

ちょうせいしゅん

趙世駿

かいしよりんがんとうしやうぎやうじよしへい

《楷書臨雁塔聖教序四屏》

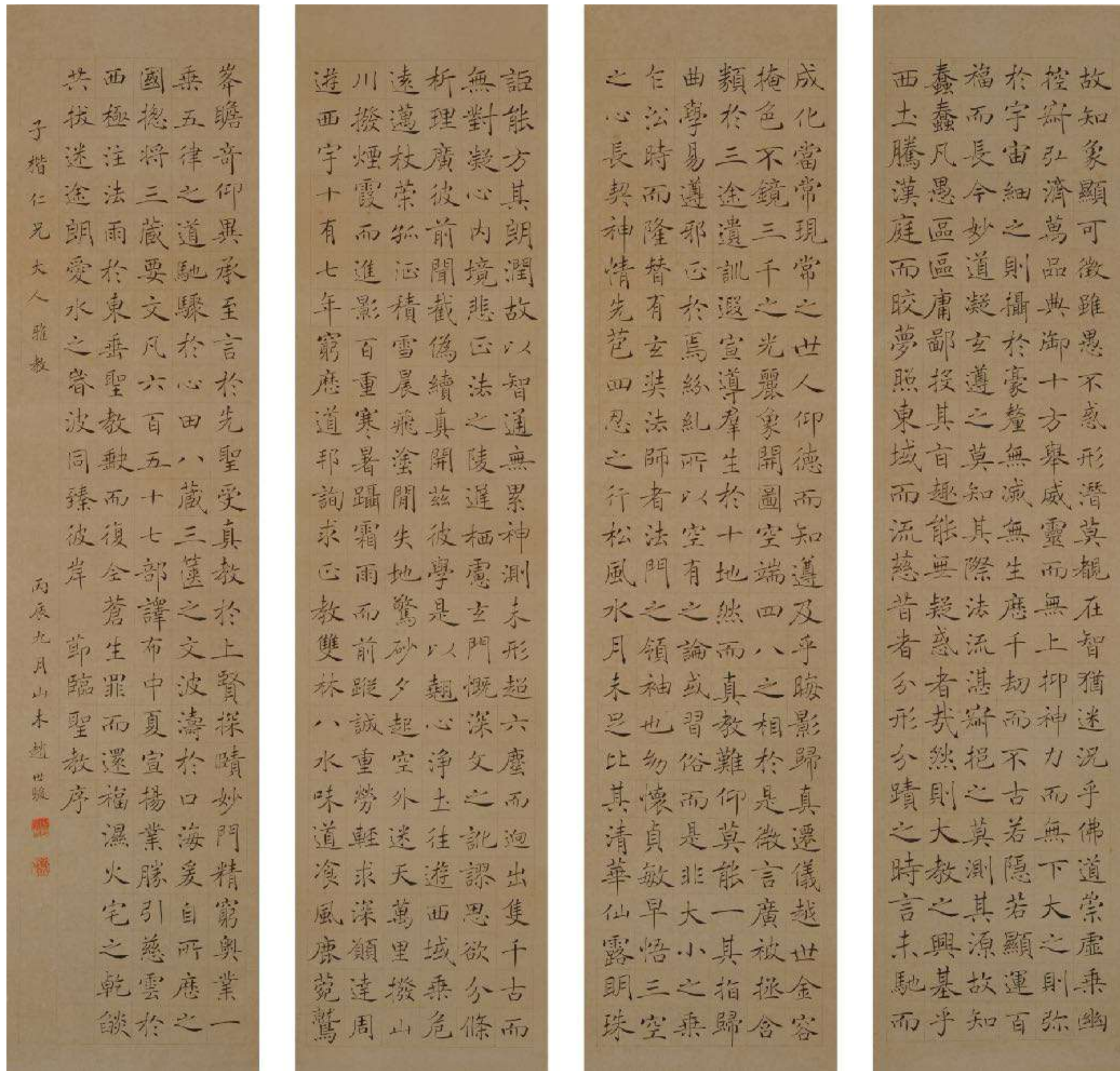
【観峰館オンライン講座】第37回 観峰館所蔵品を鑑賞しよう（10）

根來 孝明（観峰館 学芸員） 2022/11/24

はじめに

はじめに 講座の目的と内容

1. 趙世駿について
2. 褚遂良《雁塔聖教序》
について
3. 原本と臨書の比較



趙世駿《楷書臨雁塔聖教序四屏》各84.9×20.2cm、中華民國5年（1916）觀峰館藏

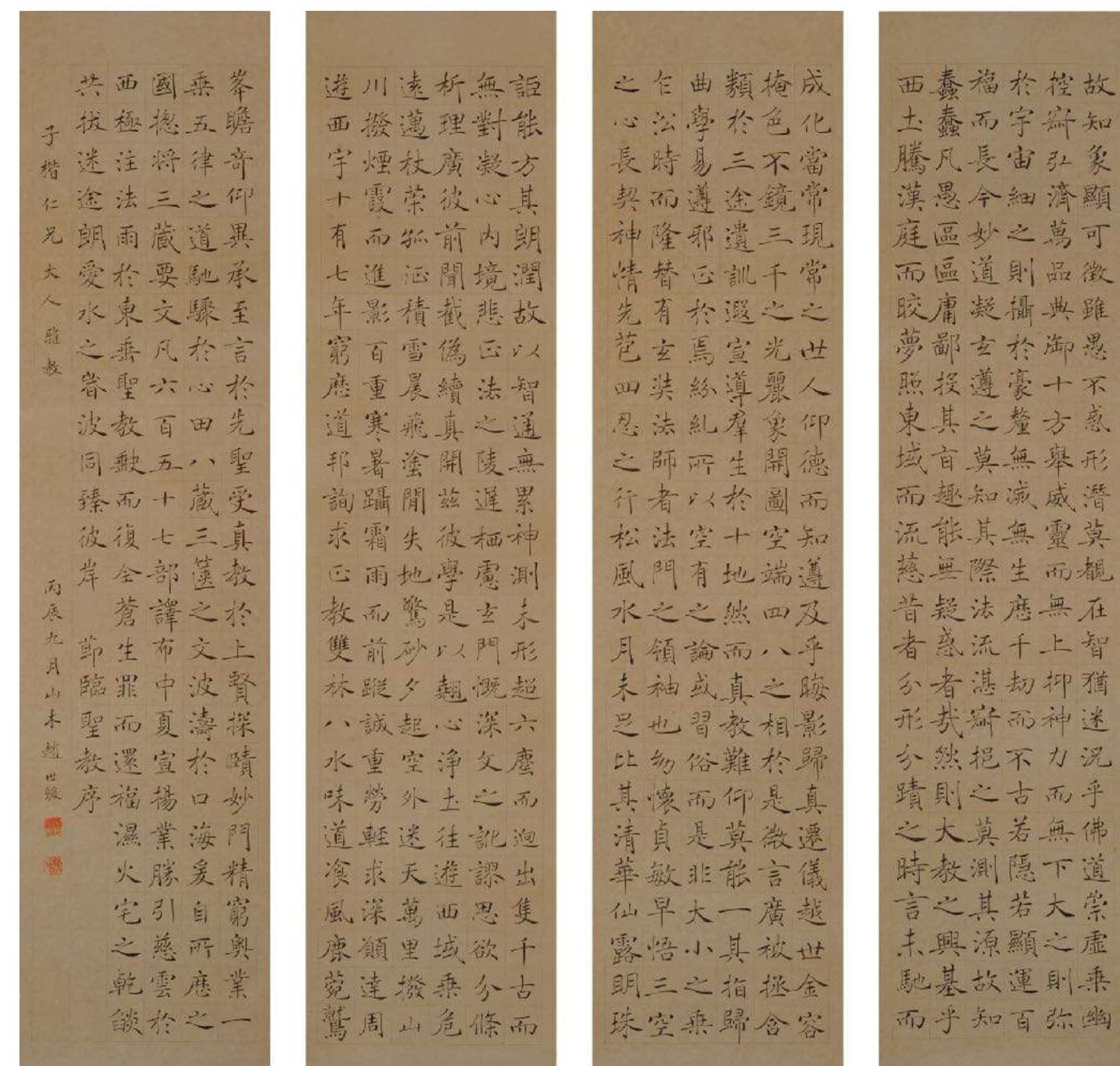
1. 趙世駿について

趙世駿（?～1928）

俞劍華編『中国美術家人名辞典』上海人民美術出版社、1998年、1274頁

・趙世駿（?～1928）、字を声伯、江西南豊の人。陳宝琛（1848～1935）の弟子。

・書は鍾繇（151～230）や王羲之（303?～361?）を学んだのち、中年以降は褚遂良書法（＝褚法）を学ぶ。



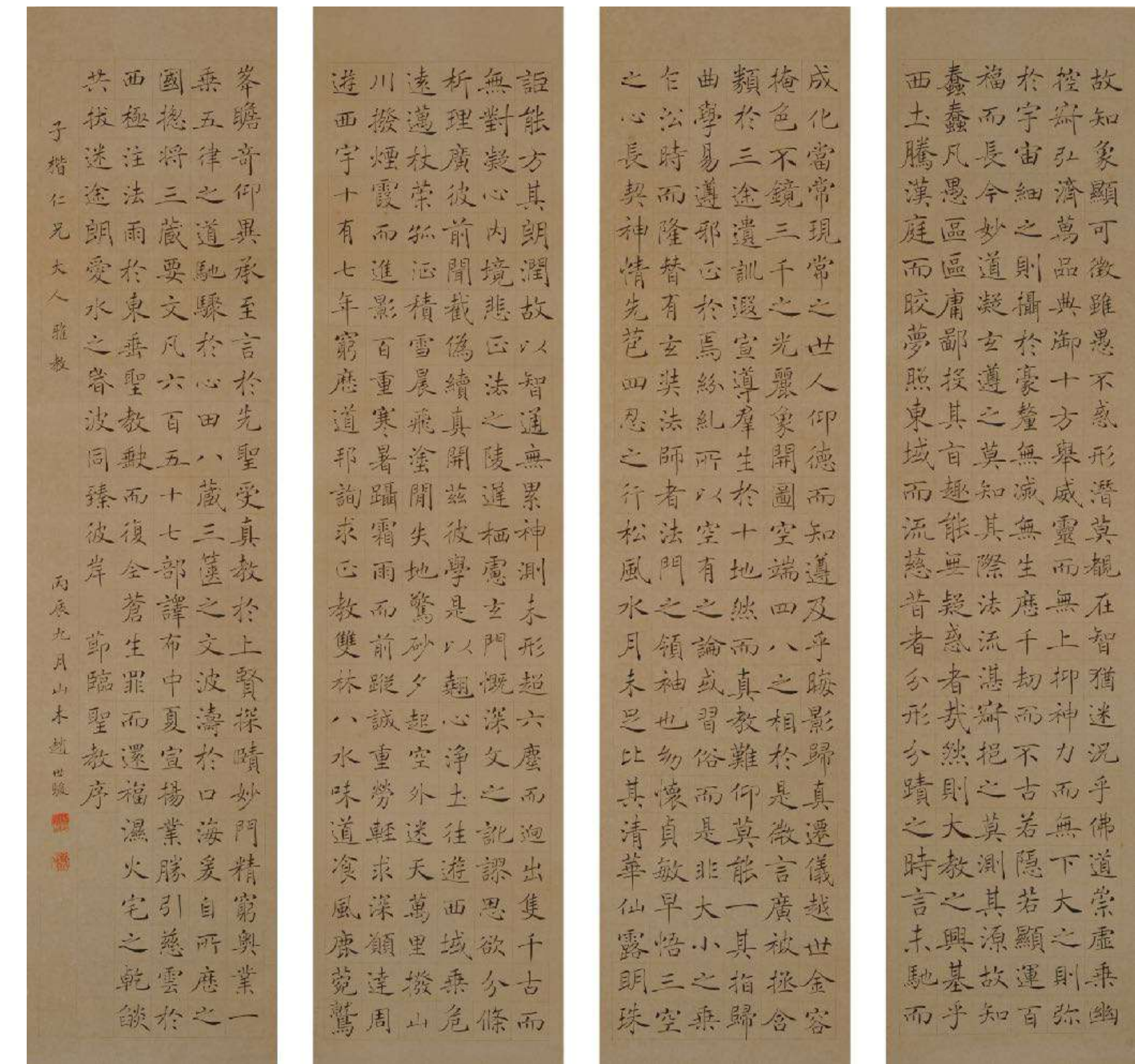
趙世駿《楷書臨雁塔聖教序四屏》各84.9×20.2cm

中華民國5年（1916）觀峰館藏

「趙世駿」

中村伸夫『中国近代の書人たち』二玄社、2000年、158-161頁

- 清末に流行を見た楷書様式といえは、誰でも趙之謙（1829～1884）や張廉卿（1823～1894）などの作品に代表される、いわゆる**北魏様式**が真っ先に念頭に浮かぶだろう。
- 確かに、**北魏書法**は、清末以降の楷書を支配するかのごとき大きな潮流となり、時代の風尚（=好み）をも反映する一様式として君臨した。



趙世駿《楷書臨雁塔聖教序四屏》各84.9×20.2cm

中華民國5年（1916）觀峰館藏

北魏時代 (386~534)

殷	西周	春秋	戦国	秦	前漢	新	後漢	魏	西晉	十六国	北魏		東魏	北齊	隋	唐	契丹	遼	金	元	明	清	中華民國	中華人民共和國
		吳	西魏					北周			五代十国	夏												
		蜀	東晉					宋		齊		梁	後梁	陳			北宋	南宋						

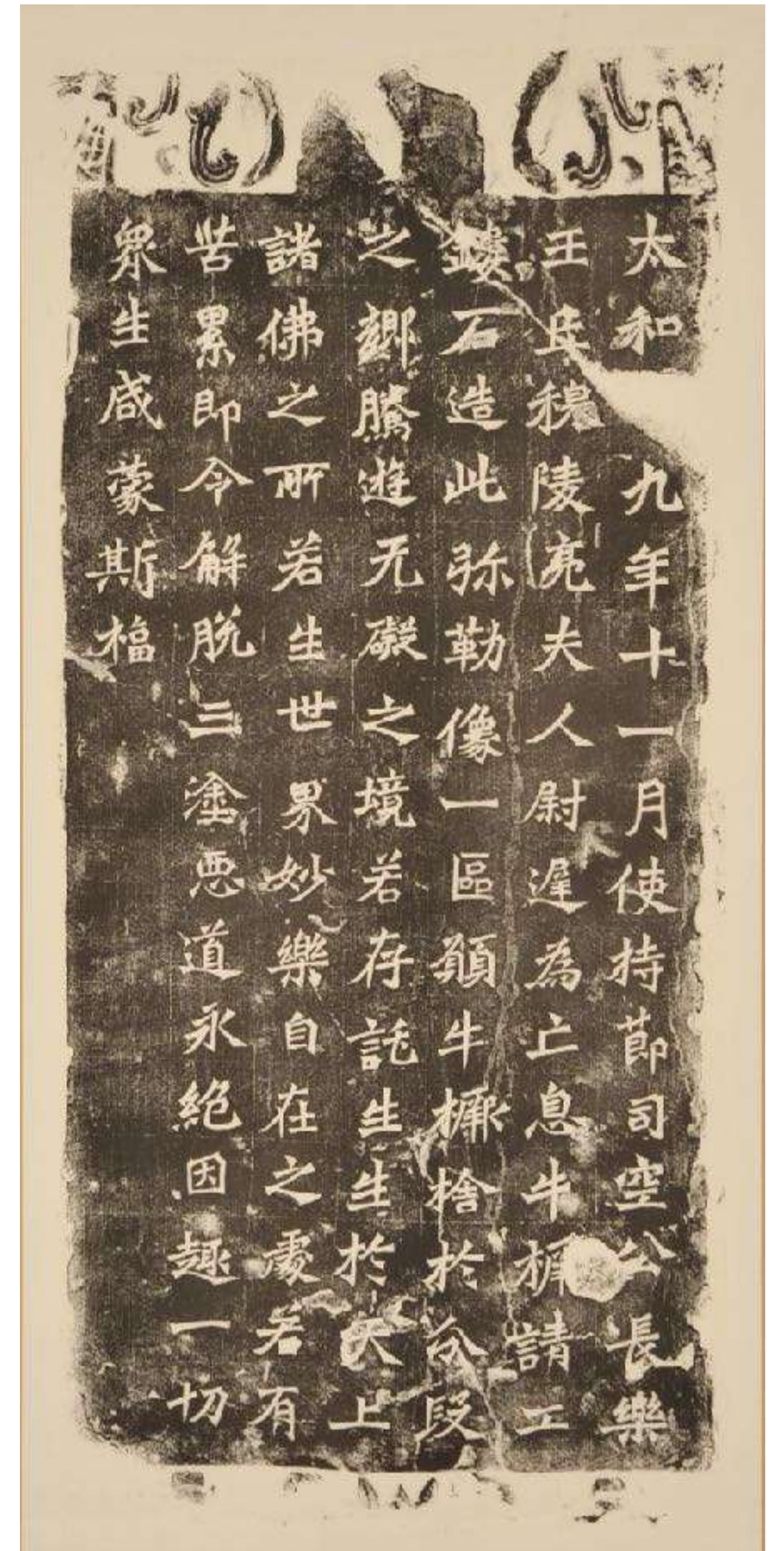
縄文	弥生	古墳	飛鳥	奈良	平安	鎌倉	南北朝	室町	安土桃山	江戸	明治	大正	昭和
----	----	----	----	----	----	----	-----	----	------	----	----	----	----

ぎゅうけつぞうぞうき

《牛櫪造像記》

南北朝時代 北魏 太和19年 (495)

- ・ 子息の牛櫪を亡くした母の尉遲 (うっち) が、495年の11月に追善供養として弥勒像1体を造った際の経緯を記す。



《牛櫪造像記》南北朝時代
北魏 太和19年 (495) 觀峰館

思賢樂古如渴如飢

張廉卿弟張裕釗

垂象表式有模有楷

素善觀家大人雅鑒

張裕釗（張廉卿）《行書八言對聯》
清時代後期 觀峰館

无礙之境
若生世界

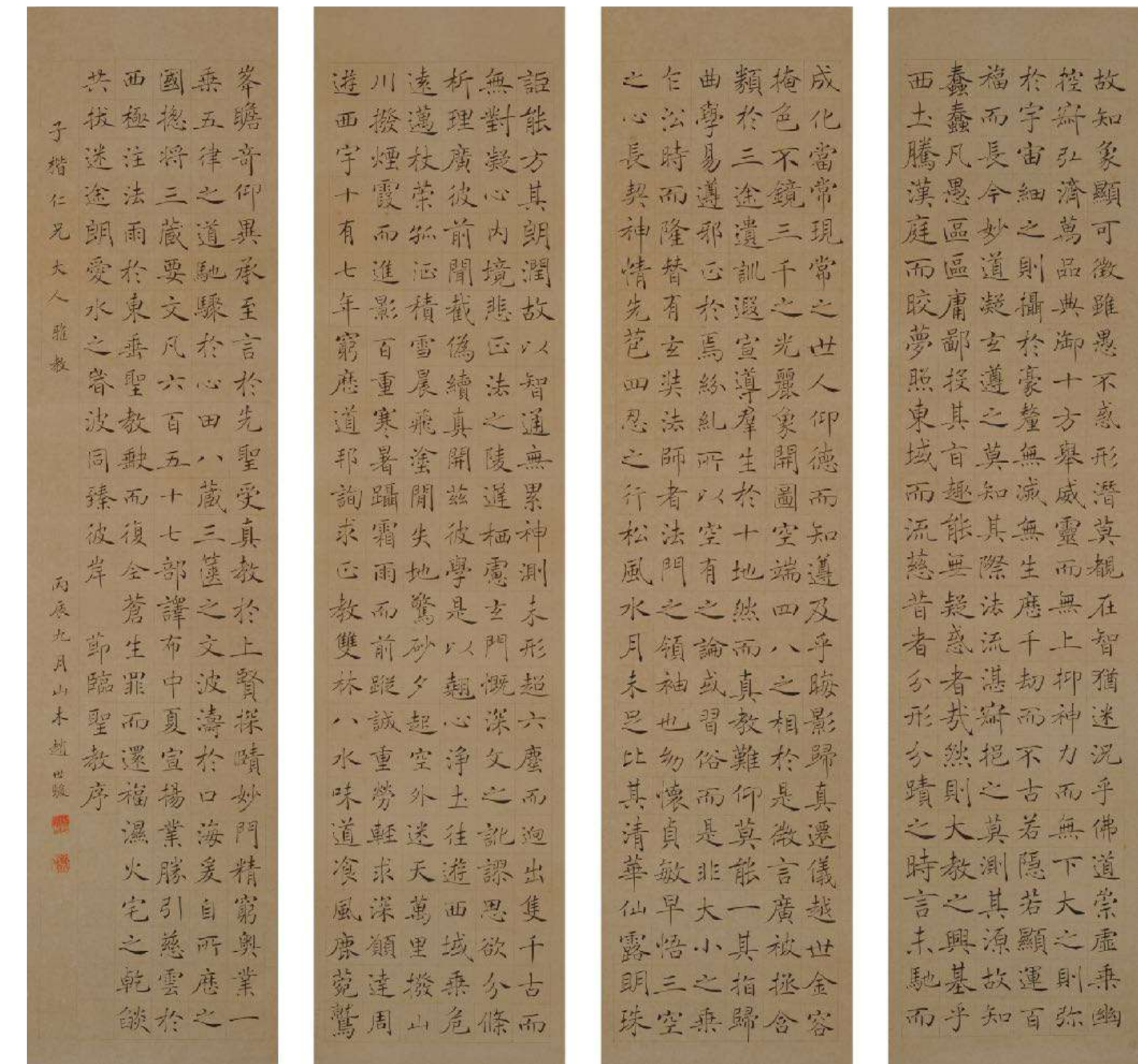
太和九年十一月使持節司空公長樂
王長陵亮夫人尉遲為止息牛欄請工
鑿石造此弥勒像一區願牛欄捨於公
之鄉騰遊无礙之境若存託生於天上
諸佛之所若生世界妙樂自在之處若有
苦累即今解脫三塗惡道永絕因趣一切
衆生成蒙斯福

《牛欄造像記》南北朝時代
北魏 太和19年（495） 觀峰館

「趙世駿」

中村伸夫『中国近代の書人たち』二玄社、2000年、158-161頁

- このような時勢にあって、当時は指標とされることが少なかったと思われる唐代の楷法に着目し、これを専習して秀作を遺した趙世駿は、いかにも得意な存在であるといわなければならない。



趙世駿《楷書臨雁塔聖教序四屏》各84.9×20.2cm

中華民國5年（1916）觀峰館藏

2. 褚遂良《雁塔聖教序》について

ちよすいりょう

褚遂良 (596~658)

唐時代の書家

- 即位前の太宗 (598~649) に信任された褚亮 (560~647) の子。自身も太宗に重んじられる。
- 宮廷の文書・詔勅をつかさどる中書省の長官である中書令に進んだ。
- 太宗の命で、王羲之 (303?~361?) の筆跡の鑑定や収集整理に携わった。



褚遂良《雁塔聖教序》部分
唐時代 永徽4年 (653) 觀峰館

ちよすいりょう がんとうしょうぎょうじょ

褚遂良 《雁塔聖教序》

唐時代 永徽4年 (653)

- 西安市内の慈恩寺境内にある大雁塔の壁面に嵌め込まれている二つの碑の総称。
- 玄奘三蔵 (602~664) がインドより大量の經典を持ち帰り、これらを漢語に翻訳した功績をに對して、時の皇帝である太宗とその子・高宗が文を寄せたもの。
- 「初唐の三大家」の1人である褚遂良 (596~658) の書。



褚遂良《雁塔聖教序》部分
唐時代 永徽4年 (653) 觀峰館

おうようじゅん

欧陽詢 (557~641)



欧陽詢《九成宮醴泉銘》
翻刻本 部分 原碑：唐時代
貞觀6年（632）觀峰館

ぐせいなん

虞世南 (558~638)



虞世南《孔子廟堂碑》翻刻本
部分 原碑：唐時代
貞觀2~4年（628~630）頃
觀峰館

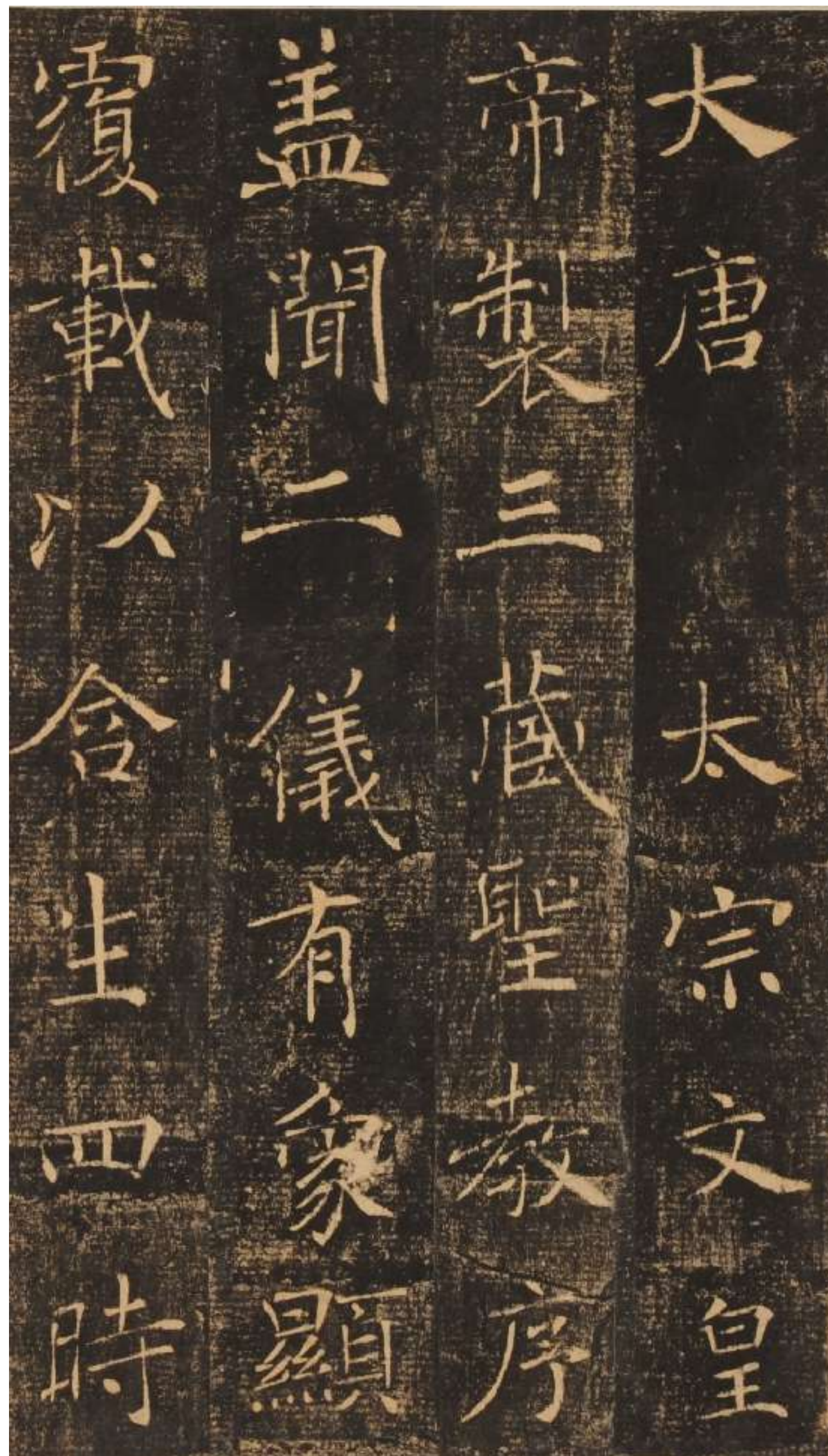
ちよすいりょう

褚遂良 (596~658)



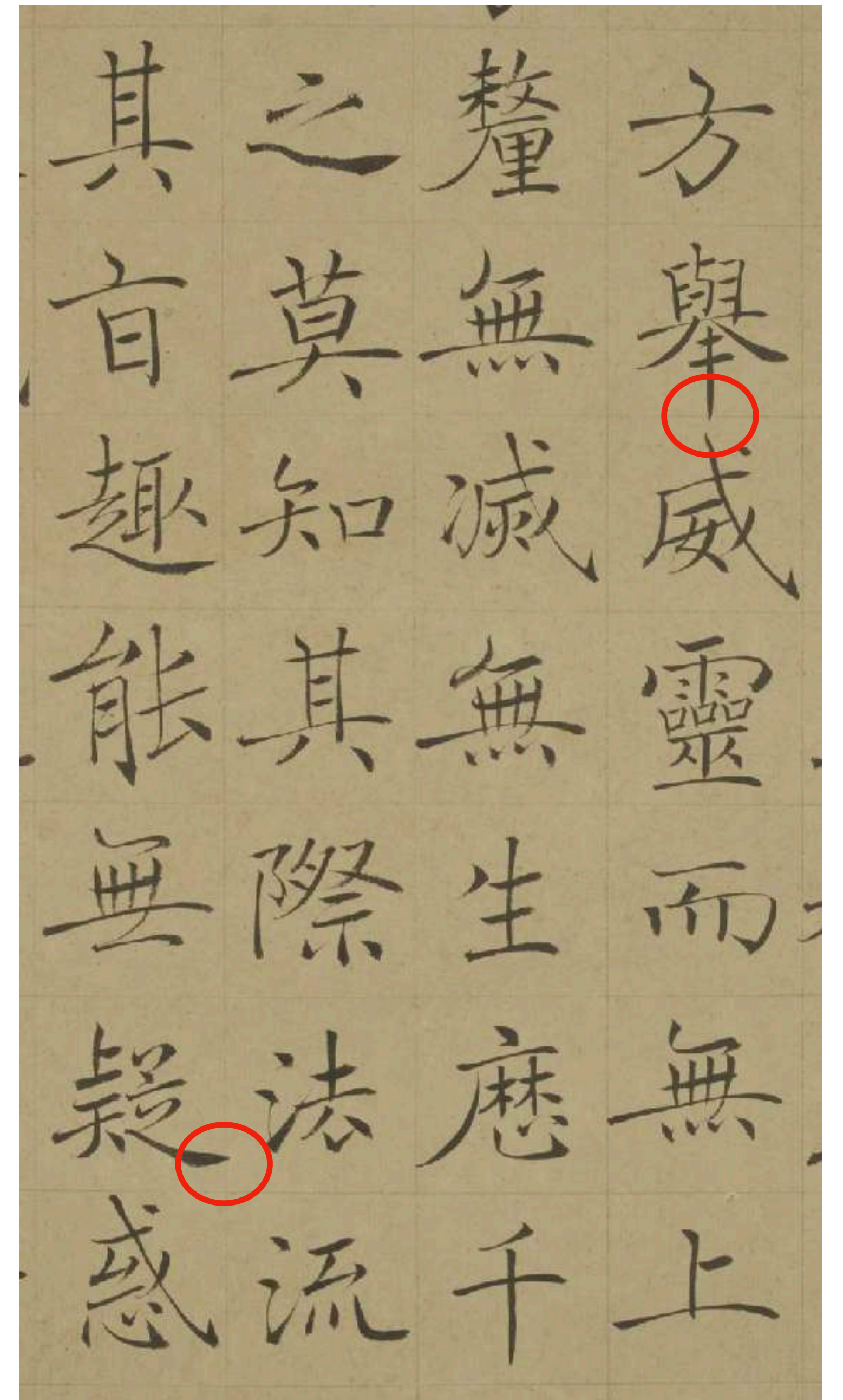
褚遂良《雁塔聖教序》部分
唐時代 永徽4年（653）觀峰館

3. 原本と臨書の比較



褚遂良《雁塔聖教序》部分
唐時代 永徽4年（653）觀峰館

- 本紙1枚に6行（4幅目のみ5行）／各行26字（最終行は14字）合計586文字の臨書作品。
- 臨書は本紙に罫線が入っている。
- 字間と行間に一定の余白がある／臨書は一部、罫線を超える。

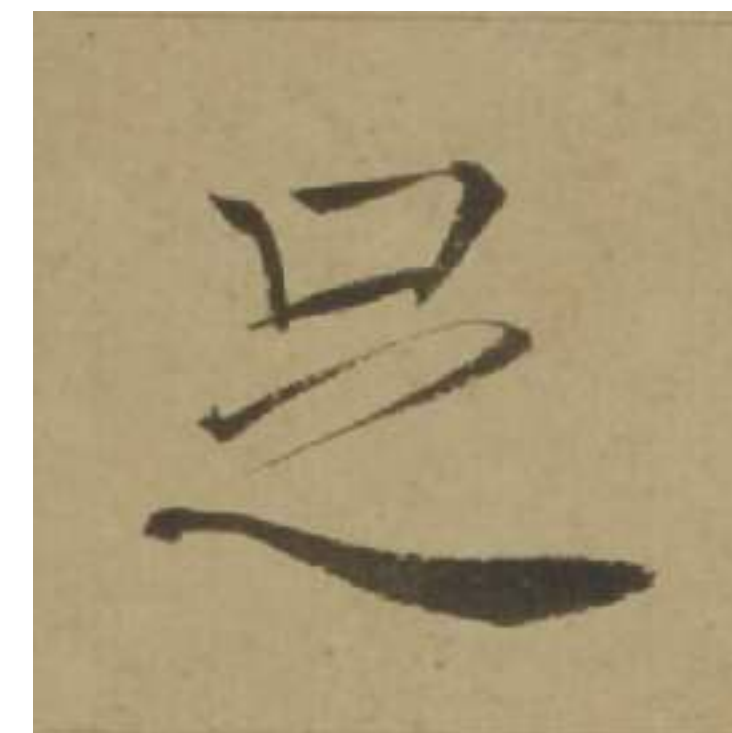


- 均衡のとれた安定感のある字形（「知」や「顯」の偏／旁など）。
- 肥瘦のある柔らかな線質（「可」や「不」の横画など）。
- 手本である《雁塔聖教序》を忠実に臨書しているように見える。

手本と異なる字形／線質も存在する



- ・「足」：原本は上部を小さく下部（ハライ）を大きく（長く）／臨書は上部も下部（ハライ）も大きく（長く）。



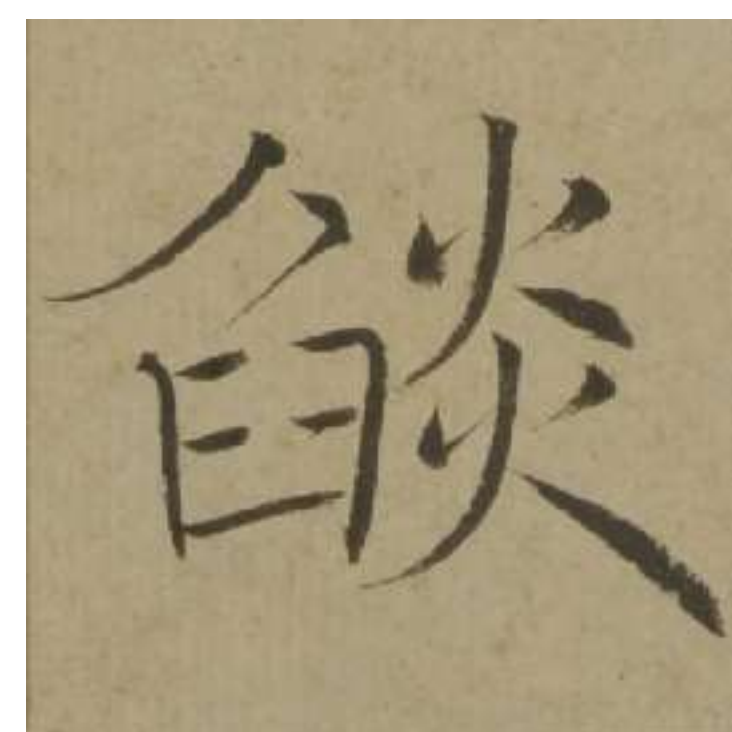
2-6-18 「足」

- ・「泫（エン／そう）」：原本はさんずいの1画目が旁（公）よりも上部に位置している／臨書はさんずいの1画目が原本ほど高くない＝旁（公）と横の中心を揃えるような位置にある。



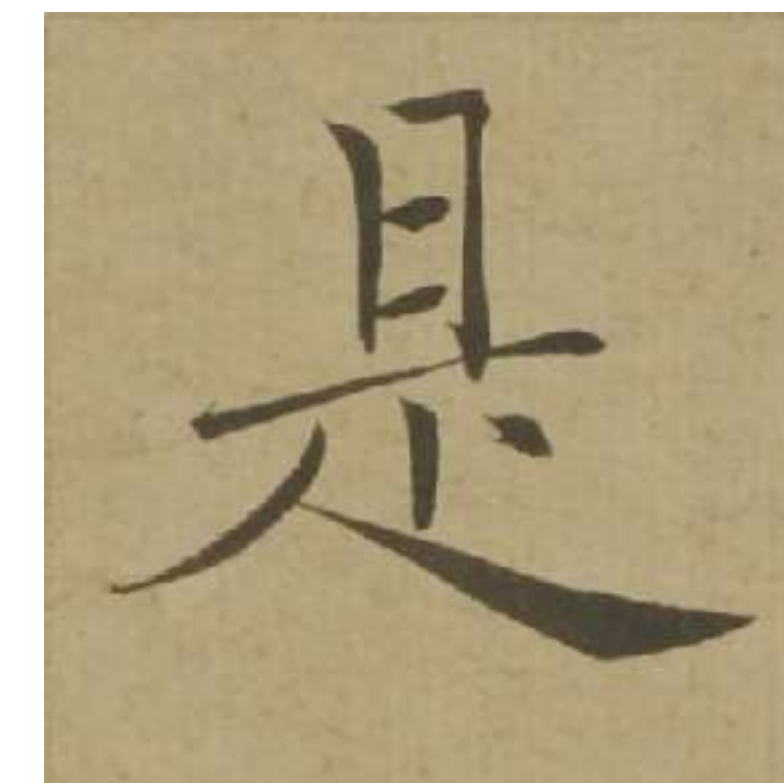
2-5-2 「泫」

- ・「燄（エン／ほのお）」：原本は1画目がやや短く最終画が長い／臨書は最終画の長さに釣り合うように1画目が長い。



4-4-26 「燄」

- 原本では右ハライを強調するような字形になっている（ハライ以外の点画が左側に寄せられている） / 臨書では左右対称に近い字形に変更されている。



2-4-2 1 「是」

- 「是」の日や縦画の位置
- 「波」4画目の左ハライを長く左方向へ
- 「文」3画目の左ハライを3画目の起筆を超えるくらい長く左方向へ）。



4-2-1 7 「波」



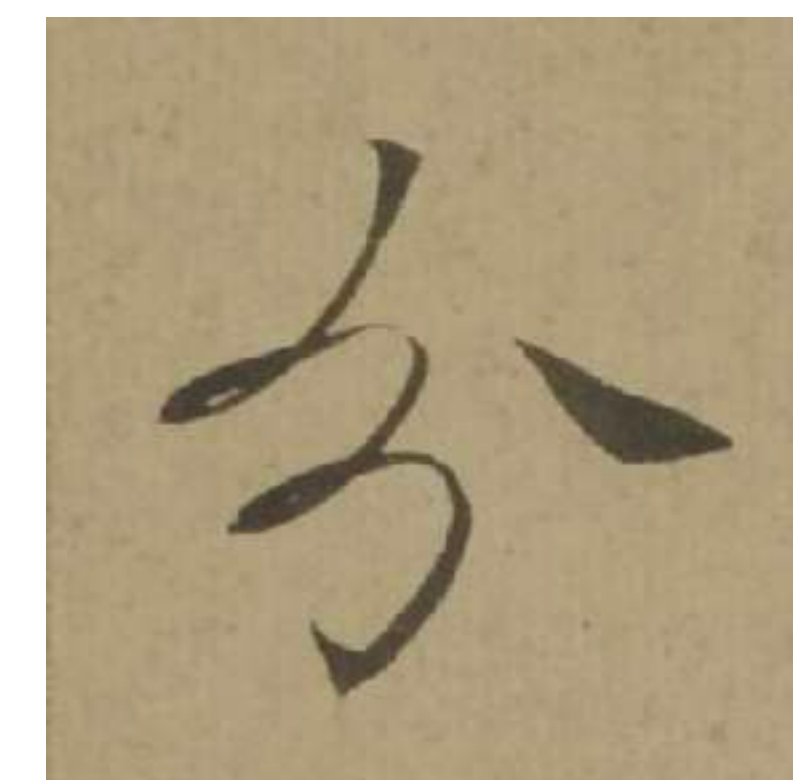
4-2-1 6 「文」

- 点画と点画を繋ぐ／結ぶ連綿線が表れている。



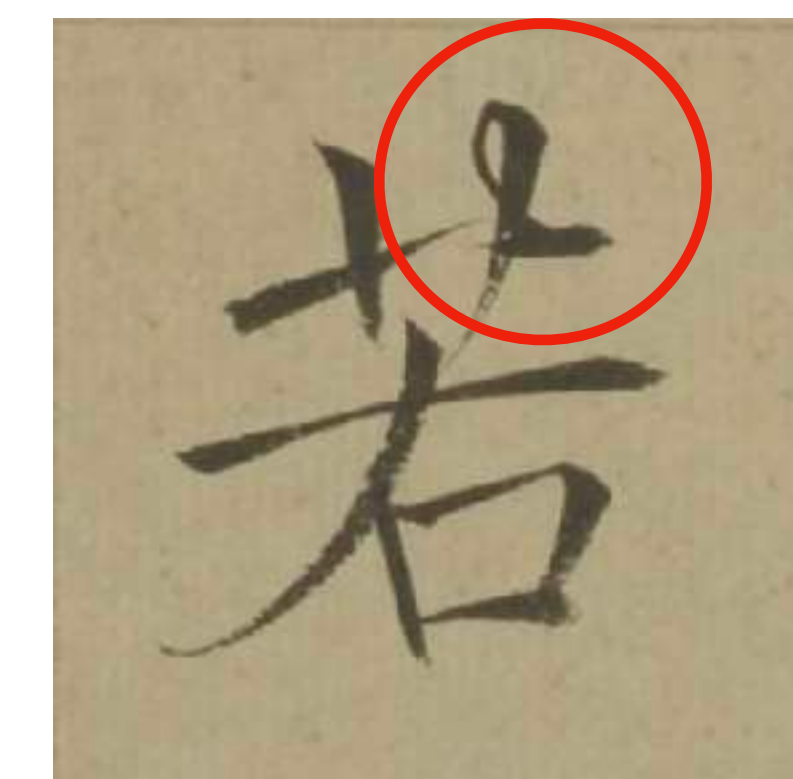
1-3-13 「無」

- 点画と点画を繋ぐ／先に書いた点画の上を通過して（重なって）結ぶようになる。



1-6-19 「分」

- 進行方向に従って勢いよく回転するもの／進行方向を逆転させて回転するもの。

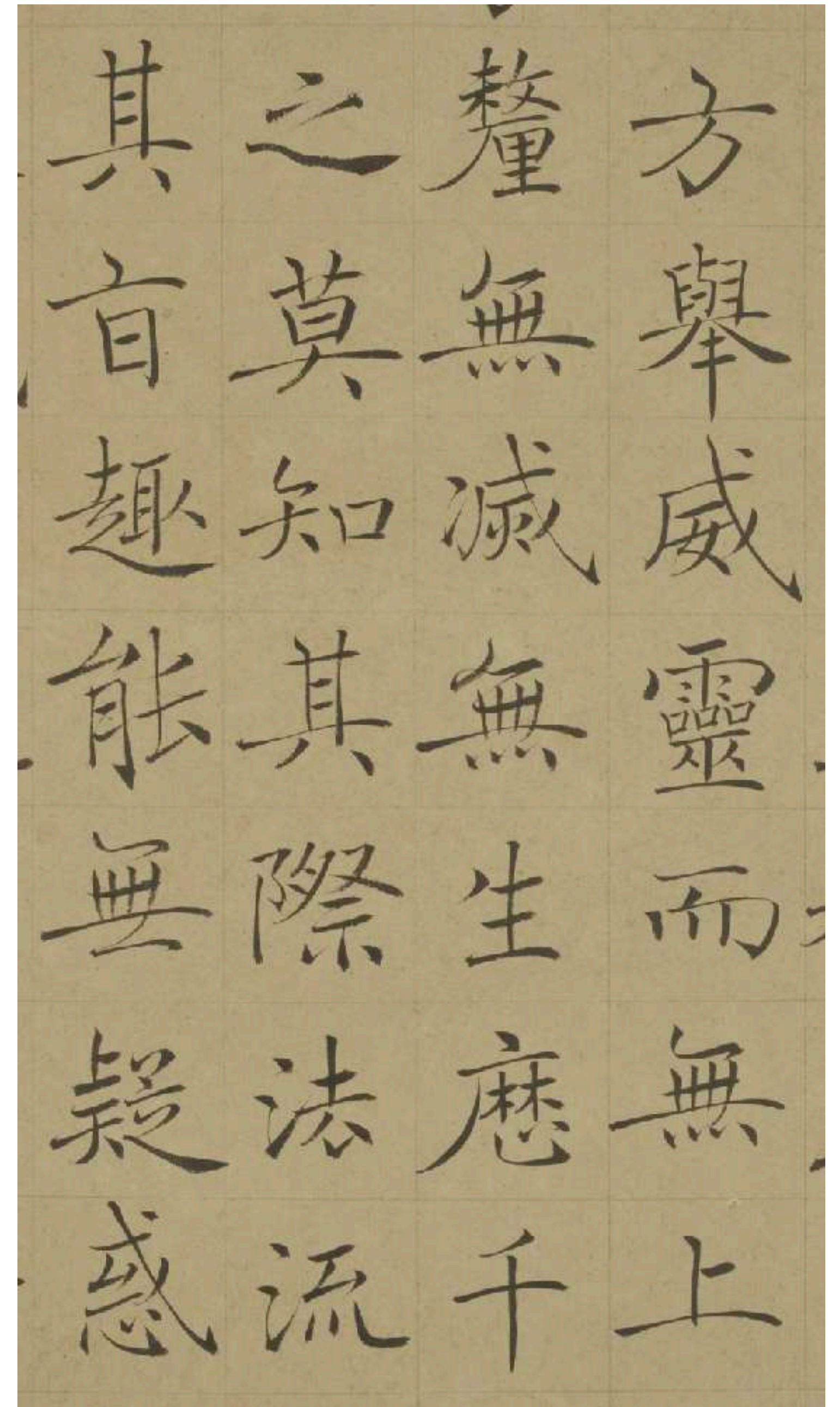


1-3-23 「若」

- 原本に見られる点画の一部を強調する字形を、左右対称に近い均衡の取り方に変更している。
- 原本に見られる肥瘦のある柔らかな線質を再現する／やや強調してさらに躍動感あふれるものにしてしている。
- 趙世駿なりの解釈を加えた《雁塔聖教序》の臨書。

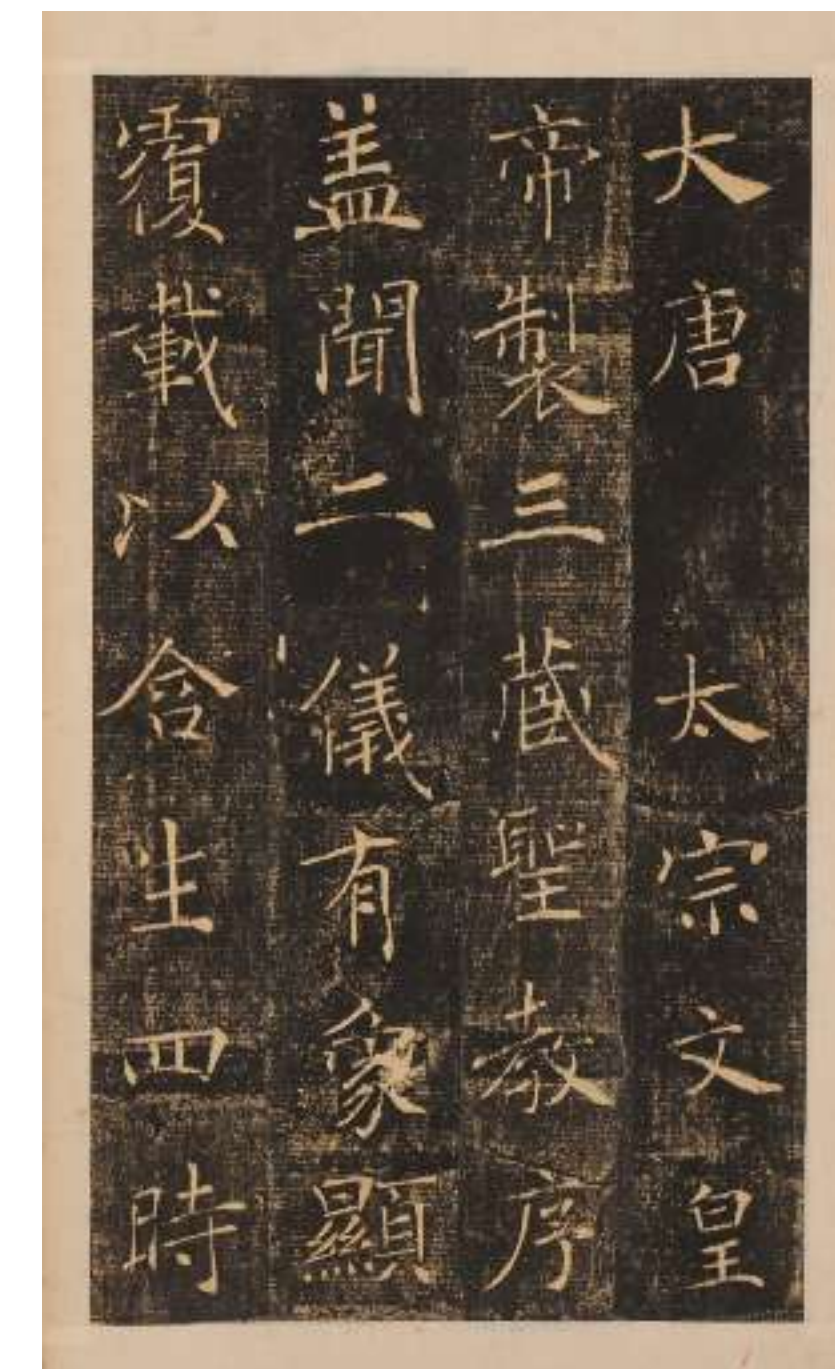
なぜ解釈する必要があるのか？

→ 「拓本」を手本としているから



趙世駿《楷書臨雁塔聖教序四屏》部分

- 拓本：いつ採られたものかによって、手本としての情報量が変わる。
- 石碑の状態が悪いと字が欠けて失われたり、線が欠けて元の書風が分からなくなる。また、刻し直すと書風が変わることもある。
- 拓本を手本とする＝元の書風がどのようなものか、書家による解釈が必要となる。

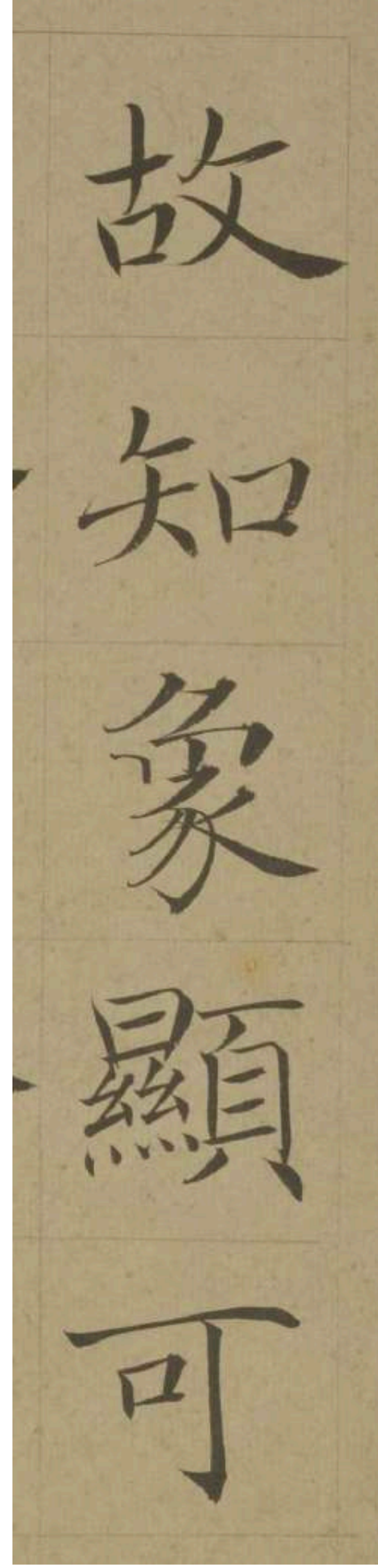


おわりに

おわりに

講座の内容

1. 趙世駿について→北魏の書法が流行している中で、唐代の書法に注目した人物。
2. 褚遂良《雁塔聖教序》について→毛筆の弾力を活かした肥瘦のある線を用いる作品。
3. 原本と臨書の比較→一部の字を、左右対称に近い字形／原本よりも躍動感あふれる線質に変更している。



観峰館オンライン講座のご案内

2022年12月～2023年1月

第38回 「探してみよう！見ておきたい日本の石碑（1）」

日時：2022年12月13日（火）14：00～（約40分）

講師：寺前 公基（観峰館 学芸員）

第39回 「作品に書かれた「書譜」の言葉（1）」

日時：2023年1月25日（水）14：00～（約60分）

講師：根來 孝明（観峰館 学芸員）